

八色の森から Origin

令和二年度

奥只見レクリエーション都市公園
指定管理者 むつみグループ

藤塚 治 義

すべてはここから始まった。

平成三十年三月に私は南魚沼市にひとつの提案をしました。それは市報に八色の森公園やその周辺の自然情報を紹介するものでした。

南魚沼市広報誌への投稿企画

「八色の森から」（仮称）

企画趣旨

八色の森公園及びその周辺の自然の情報を南魚沼市民の皆様に紹介する。

紹介にあたっての注意事項

イベント情報ではなく、あくまで自然情報を紹介する。

自然情報の中でも、身の回り、道路の脇や田圃など、気軽に歩けるような場所で見られるものや、誰でも名前を知っているような生き物に限定する。深山の中のもの（蘭や高山植物）などは紹介しない。

提案とともに二つの記事を見本として送りました。「カタクリ」と「ユキツバキ」でした。

四月のある日、南魚沼市の市報担当の方から市報五月一日号から記事を掲載しますので、原稿「ユキツバキ」を確認してくださいと依頼がありました。こうして『八色の森から』は、平成三十年五月一日号から連載が始まりました。

その後、年号は平成から令和へと変わり、令和三年四月一日号でまる三年となります。お陰さまで連載として続けることができました。読んでくださっている皆様に感謝しております。

市報に掲載される原稿はレイアウトの都合などで一部が変更される場合があります。この冊子では市報に掲載される前の元の原稿を紹介したいと思います。

著者紹介

藤塚 治義

奥只見レクリエーション都市公園
指定管理者むつみグループ
公園管理事務所 所長

一級ビオトープ計画管理士・
技術士（総合技術監理部門・環境部門・建設部門）
公園管理運営士

新潟県のシダ（リョウメンシダ）

日本シダの会という団体が全国の郷土のシダを決めています。新潟県のシダはリョウメンシダです。リョウメンシダの名前の由来は諸説あるのですが、私は自身の体験から標本（押し葉）にすると表裏がわからなくなるから「両面」シダという説が一番もつともらしいと考えています。リョウメンシダは県内では非常にありふれたシダです。

本種は常緑性で、胞子を付けた葉は雪で地面に押しつぶされて、そのまま冬を越え雪が解けると再び立ち上がります。そして、前年の葉が頑張り続けているうちに新しい葉が開いてきます。春先に年寄りがもうひと頑張りして若いものを育てるというのは、まったく何とも雪国新潟らしくて、新潟県のシダというのにふさわしいように思います。ただ、この冬は雪がなかったのです。リョウメンシダもびっくりしているのではないでしょうか。

八色の森では本種以外にも、イヌ

ワラビ、トラノオシダ、クジャクシダ、ワラビ等などたくさんシダを見ることはできます。シダは花が咲かない一見すると地味な植物ですが、興味深い植物です。

（令和二年四月一日号）



シダ植物という花が咲かない地味な植物というイメージがありすが、シダはなかなかユニークです。私も多い植物です。私も大学の卒業論はシダがテーマだったので思い入れがあります。シダを研究して作れ一番助かるのは薄いので標本作りやすいことでした。．．．なんて言うと先生に怒られそうですね。八色の森公園にもシダは多数生育しています。種類によって生育環境が微妙に違います。そんなことをみるのも興味深いです。

山菜のワラビやゼンマイ、コゴミ（クサソテツ）、ツクシ（スギナ）もシダの仲間です。

八色の森で見られるシダを思いつくままに上げると、スギナ、ワラビ、ゼンマイ、リョウメンシダ、ヤブソテツ、クサソテツ、サカゲイノビ、イノデ、イヌワラビ、ヤマイヌワラビ、イヌガソク、トヲシ、オシダ、クサソテツ、ベニシダ、コタニワタリ、シダ、マキシノブ、コタニワタリ、クサソテツ、などなどです。

八色つつじ（レンゲツツジ）

八色の森公園管理棟の脇にある朱色の橋は「つつじ橋」の名があります。旧大和町の花「八色つつじ」の花の色をイメージしたものです。

かつては八色つつじは八色原の田んぼや畑の境界などによく見ることができました。八色の森公園にも多数植えられています。実は、このつつじ、葉にはアンドロメドトキシン、花にはロドヤポニンなどの毒を持ちます。そのため牛や馬が食べないので農地のなかに残されていたと言われます。また、春の農作業の忙しい頃、田んぼの脇できれいに咲き誇るつつじはきつと農家の皆さんの目を楽しませていたのでしょう。

八色つつじの標準和名はレンゲツツジといますが、これは蕾がまとまって枝先についた形が蓮華に似ていることから言います。つつじの仲間の中では花が大きい種類です。八色の森公園にはレンゲツツジの他に、ヒラドツツジ、ドウダンツツジなどが植えられています。周辺

の山では、ヤマツツジ、ユキグニミツバツツジ、ホツツジなどが見られます。

（令和二年五月一日号）



美しい花には毒がある！
だから牛や馬が食べないので
界に植えたのでしょね。はじめ
この名前を聞いたとき、食べる
蓮華の台の上生まれ変わるから
レンゲツツジかと思いました。

かたつむり（ヒダリマキマイマイ）

梅雨時期にカタツムリというのは定番ですが絵になります。八色の森では何種類かのカタツムリを見ることが出来ます。大型で一番よく目にするものがヒダリマキマイマイです。名前にあるように殻が「左巻き」です。新潟県ではこの種が一般的なのでカタツムリという左巻きのイメージがあります。全国的にみるとカタツムリは右巻きのものが多いのです。少し小型で地下道などの壁によくみられるのがウスカワマイマイです。その他、ニッポンマイマイなどが見られます。

カタツムリは移動能力が低いため地域に固有の種が進化しやすいと言われています。県内にも地域限定で見られる種（サドマイマイ、ムラヤママイマイなど）がいます。しかし、残念なことに人為的な移動等による分布の攪乱がみられます。一度だけ、関東地方に普通にみられるミスジマイマイと思われる殻を拾ったことがあるのですが、八色の森にいるのかどうか調べているところです。

（令和二年六月一日号）



ヒダリマキマイマイ

ネジバナ（左：左巻き 右：右巻き）

ネジバナ

一般的にランの仲間には高級な花、もしくは、珍しくて貴重な植物というイメージですが、雑草扱いされる珍しいランがネジバナです。ネジバナは八色の森の芝生に普通にみることが出来ます。

ネジバナは名前の通り、花がねじれて（螺旋状に）付いていることが特徴です。このねじれ方には左巻きも右巻きも両方見られ、ねじれずにまっすぐ付くものもあります。多年生なので同じ株が翌年も咲くのですが、株の寿命はそれほど長くなく、栽培で維持するのは意外と難しいようです。

ランの仲間の栽培が難しい理由として、ランは細菌（菌根菌）と共生関係にあり、そのバランスが崩れると枯れてしまうためと言われます。また、ランは虫媒花であり花粉を運んでくれる昆虫がいないと種を作れません（例外あり）。

芝生にたくさん生えているネジバナですが、それは土壌の細菌と花粉を運ぶ小さな虫たちに支えられています。

（令和二年七月一日号）

トノサマガエルと
トウキョウダルマガエル

トノサマガエルは容姿が端正でいかにも殿様という風貌をしています。八色の森では初夏から秋まで主に光の池周辺で見られます。

トノサマガエルによく似たトウキョウダルマガエルというカエルがいます。両種は分布域が異なり、関東から仙台にかけてトウキョウダルマガエル、それ以外の本州・四国・九州などに広くトノサマガエルが分布しています。新潟県は両方の分布域が重なっており両方見られます。しかし、そっくりなため混同されていることが多い上に、実は雑種になっているという報告もあります。八色の森ではトノサマガエルがほとんどですが、六日町付近ではトウキョウダルマガエルがたまに見られます。

両方とも在来種の中では大きくて強いカエルですが、水田などの生息環境の変化や外来種ウシガエルとの競争に負けて減少したと言われています。そのため両種とも、環境省

の準絶滅危惧、新潟県の絶滅危惧II類に指定されています。
(令和二年八月一日号)



トウキョウダルマガエル
背中が全体的に黒い



トノサマガエル
背中が全体的に黒い

両生類は、昔は両棲類と書きま
した意味です。水の中と陸上と両方に棲む
八色の森公園の主要なカエルはト
ノサマガエルです。自遊池の周りは
に多く、おそろく周辺で越冬して
いるものと思えます。掘り出すと死
んでしまう可能性があります。調査は
自粛しています。
オモリアオガエルやクロサンショウウ
でなどは、夏場は山の森の中にと
水の中に移動し、春先の繁殖期にな
いに棲みます。山地の森とつなが
ない八色の森公園では、魚沼市に
ある五公園では普通に見られるこ
らの仲間が見られないわけです。
チガエル、アマガエルなどは成体にな
っても田んぼとか水場の周辺に
るわけです。八色の森でも見ること
に両生類は生息環境が陸域と水域
にまたがり、移動経路も含めて多様
な環境を必要とします。それだけ
環境の改変の影響を受けやすく、注
意していかないといつものまにか
いてしまいかねない生き物です。

オオバコ

八色の森の芝生広場で芝を押し
のけて広がる厄介な雑草がいくつ
あります。その一つがこのオオバ
コです。誰でも知っている有名な雑
草だと思います。

オオバコは地面から葉が出て、そ
の間から花茎が立って花が咲きま
す。花は茎の下側から咲きだし上
に登っていきます（このような咲き方を無
限花序といいます）。花粉が風で運ば
れる風媒花です。

オオバコは漢方薬として利用さ
れるため、五十歳以上の方には小学
校の夏休みの宿題で薬草としてオオ
バコを集めた記憶のある方も多いの
ではないでしょうか。

オオバコは踏み付けに強く、種に
粘着性があり靴などに付いて広がり
ます。ですので、芝生広場の利用の
多いところから広がっています。し
かし、踏付けなどが無いと他の植物
に負けてしまう弱い一面も持って
います。

主に人の靴が分布を拡げている

ことから、高山の登山道などにも広
がっており自然植生を攪乱するとし
て問題となっています。
(令和二年九月一日号)



私が小学校の頃は夏休みの宿題
で薬草採集というものがありま
した。指定された薬草を採集して乾か
して提出するというものです。指定
された薬草が、センブリ、ヨモギ、オ
オバコでした。我が家の付近にはセ
ンブリは生えていないため、ほとん
どの人はヨモギかオオバコを集めて提
出しました。ゲンノショウコも対象だ
ったような気がします。集めた
記憶がありません。
オオバコは踏まれて増える雑草の
代表のような植物ですが、よく言わ
れるような「踏まれても立ち上がる」
という方向の強さではなく、「踏ま
れたら、そのまま立ち上がり、踏ま
ていく」という強さを持つています。
不撓不屈ではなく、撓ったり屈した
りしてもそのまま生きれば困らない
むしろ、そのままのほう都合がいい
というのが雑草らしい強さと言える
でしょう。

ツリフネソウとキツリフネ

南魚沼では普通にみられ、沢沿いのやや湿った場所に群生することが多い花です。花の形が特徴的で、花器の吊舟（釣舟）に見立てた名前と言われています。この地域では、花が紫色のツリフネソウと黄色のキツリフネがあります。両種は花の色だけでなく、花の後ろの形が違います。ツリフネソウはくるっと巻いており、キツリフネは垂れ下がります。葉の形も少し違うので慣れてくれば葉だけでも見分けられるようになります。筒状の花の奥に蜜があるので、蜜を求めて潜り込んだ虫に花粉を運ばせます。花には迷惑なことですが、花を横から食い破って蜜だけを盗む虫もいます。

ツリフネソウはハウセンカの仲間です。成熟した実に触ると弾けて種を飛ばします。この仲間の学名インパチエンス *Impatiens* はラテン語の「耐えられない」という単語に由来すること。そのため、いくつかある花言葉に、「私に触らないで」

というものもあります。園芸品種もありますので、逸出させないようにご注意ください。
(令和二年一〇月一日号)



ツリフネソウ



キツリフネ

ウラナミシジミ

八色の森には多くの蝶がいます。アゲハチョウの仲間のように大きくて目立つものもいますが、シジミチョウの仲間のように小さくてあまり目立たないものもたくさんいます。しかもシジミチョウは表側の模様が似ているので裏面をじっくりみないと区別できないものがたくさんいます。たくさんいるシジミチョウの仲間の中で、十一月頃によく見られるのがウラナミシジミです。

ウラナミシジミは幼虫がクズやアズキなどのマメ科の植物を食べて成長します。羽の裏が波模様なのでウラナミ（裏波）と言われます。また、後翅の後端には黒い斑点があり、翅の先には尾状の突起があります。止まったときに後翅を交互に上下に動かして、斑点を目に、尾を触覚に似せて、まるで頭がそこにあるように見せかけます。このように自分の体の一部を別のものに似せることを自己擬態といいます。捕食者である鳥やカマキリを一瞬でもごまかせれ

ば生き残るチャンスが増えることになると考えられています。
(令和二年一月一日号)



自己擬態といえ、私は甲虫類のマメコガネなどはお尻を顔に似せているかと思っています。マメコガネとトラハナムグリの尻は顔に見えます。今の所、誰も賛同してくれないので、機会がありましたら、ぜひ観察してみてください。

ダイサギ

八色の森にある二つの大きな池にはほぼ毎日2種類のサギがきています。そのうちで、大型の白いサギがダイサギです（もう1種類はアオサギ）。ダイサギはくちばしの色が夏は黒く、冬は黄色くなります。

ダイサギは一年中みられますが、実は冬と夏で二つの亜種が入れ替わっていると言います。夏は亜種チュウダイサギで、日本で繁殖して冬に南方へ渡ります。冬に来ているのは亜種オオダイサギです。オオダイサギは夏に中国東北部で繁殖します。南魚沼では、ダイサギ以外の白いサギは、チュウサギ、コサギ、アマサギの3種が見られます。白くないサギは、アオサギ、ゴイサギなどがあります。私は八色の森では、アマサギ、チュウサギ以外の4種を確認しています。

池の中にじっと佇み、近くに餌となる小魚やザリガニが来ると、さつと首を伸ばして捕まえます。主に魚を食べるサギ類が多いということは

南魚沼地域の水辺が豊かであることの証拠なのかなと思います。（令和二年一月一日号）



ダイサギ



魚繁殖期になるとサギが枝を加えてます。八色の森からみて魚野川の方のどこかに巣があるのでしょう。サギ類は集団で繁殖します。それを二つと言います。魚沼市役所の近くにあることが知られています。

冬の小鳥たち3 (シメ)

冬になると八色の森は雪に覆われ、園内で観察できる生き物はとても少なくなります。そんな中で公園をにぎやかにしてくれるのは鳥たちです。群れで見られることが多いウソやシジュウカラなどと異なり、シメは渡りの季節以外は単独でいることが多い冬鳥です。

シメの特徴はなんと言ってもその太い嘴（くちばし）です。嘴が蠟のような色をしているので、別名を蠟嘴鳥（ろうしようちよう）と言います。この太い嘴で挟む力は30kg以上と言われています。その強い力で堅い木の実や甲虫などを食べています。八色の森では、エノキやカエデなどの堅い木の実を割ってその中身を食べているようです。

鳥の嘴は何を食べるかで大きさや形が異なります。堅いものを食べる鳥の嘴は太くて、隙間の虫をついばむ鳥の嘴は細いことが多いです。そんな視点で鳥をみることも楽しいのではないのでしょうか。

八色の森ではいろいろな小鳥たちが見られます。運動不足になりがちな冬、運動も兼ねて、ぜひ小鳥たちに会いに来てください。

（令和三年一月一日号）



事務所の窓にシメが衝突したことがあります。仕事をしていたとき、ドーンと大きな音がしてなにかと見に行ったらシメが窓の下に倒れていました。拾い上げて様子を見ていたら、止まらなくて気がついたようで、枝に止まらせてあげたら、少ししてから飛ぶのとききました。実は、この写真はそんなものです。

寒い朝の特典 (樹霜)

枕草子に『冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、．．(中略)．．、いとつきづきし。』という一節があります。学生時代に覚えさせられた方も多いと思います。この「つとめて」というのは「早朝」の意味です。確かに、冬の早朝、凜とした空気の中でみる雪や霜は格別です。

よく晴れた日の朝、放射冷却がおきてとても寒いときに樹木の先に霜がついて成長したものをみることできます。これは樹霜(じゅそう)といいます。

水蒸気や霧が冷やされて樹木についたものを総称して霧氷(むひょう)といいます(成因により樹氷(じゅひょう)、粗氷(そひょう)、樹霜に分類されます)。魚野川の河畔で樹木全体が霧氷に覆われるものを魚沼では「シガ」といいますが、とても神秘的で美しい光景です。ところが、八色の森でみられる樹霜は、どうも消雪パイプの水が流れている付近で

生じやすいようです。成因はともかく、冬の早朝限定の美しい氷の造形をぜひ早起きして観察しましょう。

(令和三年二月一日号)



冬の小鳥たち4（ツグミ）

ツグミは冬鳥として日本に渡ってくる鳥です。夏はシベリア地方におり、中国を通って秋に日本にやってきます。飛来するときは群れで来るのですが、日本に来た後は単独でいるものもよく見られます。今は禁止されていますが、かつては霞網で捕獲して食用とされたこともありました。

木の実も食べますが、地面をつついて虫やミミズなどをよく食べます。そのため、雪に覆われる八色の森では積雪期の前後によく見られます。地面を跳び回って、所々で立ち止まって胸をはる様子は見ているとなかなか面白いです。しかし、地面で餌を捕るためか、しばしば猫に襲われてしまうことも。

ツグミは身近な鳥でもあり、愛らしい姿をしているためか、しばしば人名に用いられています。青春小説『TUGUMI』は、吉本ばななの代表作で、「つぐみ」のタイトルで映画化もされました。お近くに「つぐみさん」

はいらっしゃいませんか？ ぜひ、つぐみさんを誘って八色の森までツグミの観察にお出かけください。
(令和三年三月一日号)



この記事で連載がまる3年となりまして。八色の森にはまだまだ多くの生き物がいます。ぜひ皆様にも公園に足を運んでいただき、実際に観察してほしいと思います。公園では季節ごとに自然観察会などを企画していますので、ぜひご参加ください。